喜怒哀楽

詠み人応援マガジン

詩歌俳柳壇ニュース

8 August Vol.63

＊「喜怒哀楽」は、文芸を楽しむ方々の活力の源を目指し㈱ミューズ・コーポレーション喜怒哀楽書房が隔月発行している情報誌です。

温古知新⑰ ～源氏物語8～ 1

笑顔礼讃西東 大呂俳句会様（新潟県・加茂市） 2～3

季節（とき）を楽しむ句会様（東京都・杉並区） 3～4

早川義郎様（東京都・文京区） 5

投稿作品 6～10

心に残った作品 10

詠み人スクランブル（夏祭りで必ず買っていたものは何ですか？） 11～13

新潟ぶらり／青山海岸 13

お客様の『リレーエッセイ』 石川明世様 14

ニュースあれこれ 15

詠み人の『リレーエッセイ』歌人 千葉聡様 16

温古知新⑰「源氏物語」8

前回までは、光源氏を主人公とした第二部までをお送りしました。今回からは、第三部の宇治十帖をお送りします。

光源氏亡き後、その面影を継ぐ人は、わずかに今上帝の三宮（匂宮）と女三宮腹の若君（薫、実は柏木の子）の二人の貴公子でした。

匂宮は元服して兵部卿となります。夕霧は匂宮を婿にと望みますが、自由な恋愛を好む当人にはその気がありません。一方薫は、冷泉院と秋好中宮に殊更に可愛がられ育てられ、元服後は官位の昇進もめざましい。しかし、自分の出生に疑念を感じ、出家の志を抱え過ごしていました。

薫の体には生まれつき仏の身にあるといわれる芳香が備わっていました。匂宮は対抗心から薫物（たきもの）に心を砕き、二人は「匂ふ兵部卿、薫る中将」と呼ばれます。

故致仕大臣（頭中将）の次男は、このころには按察大納言（あぜちのだいなごん）となり、跡継ぎだった兄柏木亡き後、一族の大黒柱となりました。北の方、真木柱との間には男子（大夫君）が一人。また、真木柱には故宮の忘れ形見の姫君（宮の御方）がいて、この姫君も大納言の邸で暮らしていました。大納言は、大君を東宮妃とすべく麗景殿に参内させており、今度は中の君に匂宮を縁付けようと目論んでいます。

髭黒太政大臣亡き後、玉鬘は遺された三男二女を抱え、零落した家を復興させようと躍起になっていました。姫君二人（大君、中君）には、多くの求婚者がいます。その後、玉鬘は、大君を冷泉院のもとへ参らせることを決意。一方、中君は今上帝のもとで気楽に過ごしていました。

そのころ、世の中から忘れられた宮がいました。光源氏の異母弟、桐壺院の八宮です。今は宇治の地で二人の姫君（大君、中君）を養育しています。彼を知った薫は、その俗聖ぶりに強く惹かれ八宮のもとに通うようになりました。

ある秋、八宮不在の宇治邸を訪れた薫は、有明の月の下で箏と琵琶とを合奏する姫君たちを垣間見ます。屈託のない、しかも気品高く優雅な姫君たちに、薫は心惹かれました。薫は女房を介して大君に逢いたいと思いますが、代わりに老女房の弁が現れます。弁は、薫の出生の秘密と柏木の遺言を伝えることを約束。薫は、秘密を知りひとり胸中に抱え込もうとするのでした。

今回は、第四十二帖「匂宮」から、第四十五帖の「橋姫」までのあらすじをご紹介しました。

出生の秘密を知ってしまった薫。この後どうなってしまうのでしょうか？　匂宮の行く末は……？

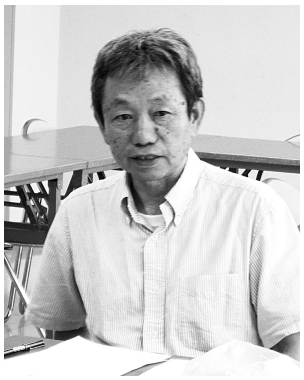
（古川久美子）

大呂俳句会

世話人 北側松太様

（新潟県・加茂市）

6月16日（土）、新潟市の関屋公民館で開催された大呂俳句会にお邪魔しました。大呂とは、かたつむりのことで、本年4月に「Dairo」創刊号を発刊。結社・師系を問わず自由に参加できる会で、第二土曜日の句会と、昨年12月に立ち上げたインターネット上のネット句会と月に2回開催されています。



▲北側松太さんは詩人でもある

世話人の北側松太さんと岩井善子さんを中心に、本日初めて参加される方も含めて7名の方が参加。土曜の午後1時から5時半まで一座目、二座目と続き、最後は席題が3つという充実した句会です。

まずは一座目、5句提出の6句選、高得点句より―

薫風を入れ繁昌の豆腐店

山の水を使っているお豆腐屋さんでしょうか、お客さんがたくさん来る評判の店で、水の冷たさ、お豆腐のおいしさまで伝わってきた／「繁昌の豆腐店」が気持ちいい。「薫風を入れ」の「入れ」は必要なのか／「入れ」が季語を説明しているから「や」で切りたいところ。「薫風や大繁盛の豆腐店」と、季語は切れ字にした方がきりっとする。

蓴（ぬなわ）摘む一しづくまた一しづく

一しづく一しづくで蓴の様子がよくでている／蓴を大切に扱っている感じが伝わってくる／しずくのような形をしている蓴を、一粒ずつと言わず一しづくと言ったところがいい。

すかさず、善子さんが今日初参加の方に「〝蓴〟ってわかりますか？　蓴菜（じゅんさい）のことですよ」と伝えている。

ぱらぱらと雨をこぼして明急ぐ

ありそうな句だが明急ぐでいただいた／「雨のこぼれて」ではなく、「雨をこぼして」と、使役の形をとっている。誰が？　それは天であり、お天道様がこぼしている、という表現のうまさと、開け急ぐの軽さも魅力。

じゅんさいのとろりと眠る水の中

「とろりと」が、水の下で睡っている感じをうまく表している。

住き人に住き思ひでや浮いてこい

こういう句を作りたいなーと思って／「浮来（ういてこい）」がぽこんぽこんと浮く時に、住き人を思い出しているんだろうなと／浮いてこいが一つの思い出であり、掛け詞になっていておもしろい。こういう季語の使いもある。

善子さん…「〝浮来〟ってわかります？　お風呂でよく使うセルロイド製の子どもの玩具のことで、夏の季語なんですよ」と説明を付してくださる。

水泥棒月夜に影を長々と

月に見られているというのがおもしろい。夏の盛り、かつて農家では田水が不足しがちで水泥棒が現れたりしたが、今はあまりいないかな（笑）。

ぬなは採りにふれんばかりに燕かな

この句は誰も採らなかったが、ここで一番大切なことは「に」を入れたこと。字余りでもいいから「に」を入れることで句が安定してしっかりする。そうしないとぬなは採りがふれるみたいで、俳句がおかしくなる。正しい日本語を使うというのはそういうこと。この癖はつけた方がいい。できれば5字で納めた方がいいけれど（笑）。

休憩をはさんでここからは二座目

青々と雨降りつづく浮巣かな

動いたり動かなかったり、その様子がよくわかる／周囲の木々の青さがよく出ている。

※浮巣…芦の茎や枯れ葉でできている水に浮かんでいる鳥の巣のこと。

青梅雨の真っ只中の伽藍かな

伽藍の堂々たる様がよく詠まれている／「伽藍かな」と押さえることで伽藍の大きな屋根が見えてくる。

四五本の竹を映せる油団（ゆとん）かな

懐かしい昔の油紙のこと？　触ると冷たい紙で、年寄りが作っていた。てかてか光る紙に、竹がうつっているという涼しげでうまい句／「四、五本の竹」がさわやかで、涼しい感じを出している。

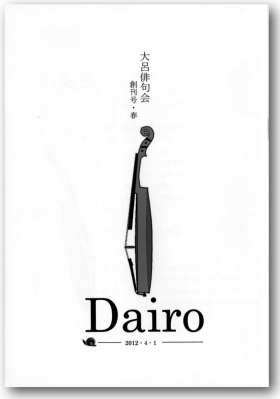
※油団…和紙を厚く張り合わせて、油か漆をひいたもの。夏の敷き物に用いる。

すたすたと来てくぐりたる茅の輪かな

ありがたくくぐるのではなく、すたすたとくぐったところがおもしろい／近くを通った営業マンか何かが、せっかくだからくぐっていこうか、というようなユニークな句。

大廂しづかになりて梅雨入りかな

「しづかになりて」という景ではなく、「大廂しんとしずかに」とか、言い留めておいて梅雨入りかな、がいい。「な



◀「Dairo」創刊号

▲句会初参加の村木さん（右）に説明をする善子さん

※句会の前の週には、阿賀野市の村岡にある蓴菜池に吟行をしたこともあり、当日は蓴菜の句が多く詠まれていた。この蓴菜採り、蓴菜筏に乗り、少しずつ移動しながら竹の長柄に括りつけた鎌で、深いところにある若芽を手繰り寄せ採取するとのこと。

りて」というのは経過だから、そこが少し弱い。

暗がりにをんをんうなる冷蔵庫

確かに昼間は聞こえないけど、夜聞こえてくる感じがよく出ている／擬音語だから、この「をんをん」はない。「おんおん」でいいと思う／「うぉんうぉん」でもいいかも。

深川のここに玉解く芭蕉かな

これいいですね。多少つきすぎの感もあるが、「ここに」がいい。想いがたっぷり入った芭蕉賛歌になっている。

さらに休憩をはさんで、今度は席題「祭り」「冷や奴」「若葉」から3句提出。天を仰ぐ方、歳時記とにらめっこの方、それぞれに脳内フル回転。高得点句より。

山一つ向うは京の祭かな

村のはずれでしょうか、遠くから祇園の祭の音が聞こえてくる／景の大きい句。

真っ新な晒に差して祭笛

「真っ新な晒」がいい／男の心意気みたいなものが伝わってくる／さぁこれから！　という一瞬の緊張感を感じる。

笹に音水に香りや冷や奴

「笹に音」と「水に香り」の表現に工夫を感じた／「水に香りや」だけだとまったく当たり前でダメだが、「笹に音」が入り対になっているから俳句になっている。

雨音のひときは高し樟若葉

樟は青葉より若葉の方がきれいでしょうか、5月6月くらいの樟の美しさが出ている。

★会場に入ると、以前違うところでお会いした方が数名いらしてうれしくなる。北側さんの講評に補足したり、初参加の方や俳句を始めて日の浅い方をフォローする岩井さん。この北側・岩井コンビの連携プレイの良さがこの句会の特徴だと感じた。誰もが自由に参加できる会とあって「続けられそうでしたら、また次回お越しください。やっていくうちに慣れるから大丈夫ですよ」という北側さんの言葉が優しい。早くはなくとも着実に歩みを進める大呂のごとく、この会がより充実した会となりますよう！

（木戸敦子）

季節（とき）を楽しむ句会

代表　田中暁子様（東京都・杉並区）

7月20日（金）、東京は新宿区アイランドタワー内にある旅行会社「クラブツーリズム」にて行われている「季節を楽しむ句会」にお邪魔しました。この句会、もともとは京王電鉄による「人」「発見」をテーマにしたコミュニティ倶楽部の一サークルとして始められたもので、当初は「それいゆ句会」として活動をしていましたが、電鉄会社の採算上やむを得ずすべて解散。現在はクラブツーリズムの文化サロン「季節を楽しむ句会」と改称し続けられています。

メンバーは司会をつとめる代表の田中さんのお友達を中心に全員が初心者。田中さんがNHK北海道大会で特選になった際に選者だった、俳誌「にれ」の木村敏男主宰のご縁で、「にれ」の元編集長だった石山雅之さんに選句と添削・ご指導をお願いしている。今月の句会は6月に行った井の頭公園の吟行句を中心に、7句選うち1句を特選に。その結果は―。

▲とにかく快活で明るい代表の田中暁子さん

特選の入った句から順にみていく

十薬を食みて長寿の象はな子

十薬を詠みたかったが、こうはうまく詠めなかった。十薬を良薬と見ている／はな子はドクダミを食べるの？　知らなかった／吟行の際、若い飼育員が草むらにいたので「何しているんですか」と聞くと「どくだみを採ってはな子の餌にします」と言っていた／あらそうなの、残念。十薬の話は聞いていなかったわ、別行動をしていたから（笑）。

十薬を食む象はな子皺深く

なかなか皺を詠み込むことは難しい／（前掲と）似かよった句だが、皆さん、皺より長寿の方がよかったんですね（笑）。作者…はな子はしわしわで、足は動かすけど前に進めずかわいそうだった。私も飼育員の話にヒントを得て作った。

西湖畔芭蕉ゆかりの合歓の花

「象潟や雨に西施（せいし）が合歓の花」という芭蕉の句がある。きっと作者は中国の西湖畔に行った際、雨が降っていてそこに合歓の花があって…それでこの句を思い出して詠んだのだと思う。教養のある方だなぁと（笑）。

作者…西湖に行った際、中国人のガイドさんが日本語で芭蕉のこの句を読んだ。勉強しているなぁ、と感心した驚

▲昨年7月に出版した合同句集「それいゆ」

きを句にした。

石山氏添削（以下、石山）…原句だと、合歓の花が「芭蕉ゆかりの」になるので「合歓の花芭蕉ゆかりの西湖畔」と置きかえた方がいい。

ひと針にときめき込めてレース編む

ときめきを忘れているので「えっ、誰にときめいているの？　夢があっていいなー」と思っていただいた／ほんと、いいわね！

柏葉の紫陽花咲いてふさ見事

意味がわからなかった／近頃、はやっている紫陽花よね。

作者…最近の品種で、葉が柏の葉に似ていて房がピラミッドみたいな円錐形になっている紫陽花のこと

ふさ、がひっかかった。

紫陽花の径に咲きたる傘の花

梅雨時の色とりどりの傘を紫陽花に見立てつつ、花よりも人が多いということを示していてうまいと思った。

石山添削…「紫陽花の雨に咲かせて傘の花」

ここからは普通選の句

目を凝らしをれば三つ四つ青くるみ

作者…目をこらしていたら青くるみが3つ4つ見えた。葉と同じような色だからでじっと見ないとわからない。

石山…「をれば」がやや理屈っぽい。

夜の帳色増す額の花ほのか

石山…夜の序につく庭の中で、額の花の色が増していくという錯覚、幻想的で詩心のわくいい句。

額の花＝紫陽花とは知らなかった。

チェロを聴く法然院の夏の闇

作者…法然院に行った際、たまたま当日夜に行われる藤原真理さんの演奏会のチケットがあるということで、とてもうれしかった。

うらやましい！／あら、私も好き。

石山…洋楽器のチェロの演奏が由緒ある寺院で行われる。その異質な対照が、夏の闇を濃くしているという句。

つばくらめ空を相手に斬り返す

きーきーと鳴く様子を、斬り返すと言っている。

石山…つばめは捕食する虫が見えないから、その動作は空を相手にすることとなる。

仏壇に向日葵活けて父偲ぶ

仏壇に向日葵、明るいお父様だったのかな、と。

作者…父のおかげで私がある。今はそれくらいしかできない。

昔の父親は、怖くてあまり話さなかったものね／父の日には向日葵を贈ろう、という動きも最近は出ているよう。

万緑や水琴窟は太古の音

石山…二句一章の鑑賞に価する。「水琴窟の」とした方がいい。万緑のスケールとかすかな音との対照がいい。

汗拭きつ児をおぶりたる若きパパ

石山…パパ・ママはできるだけ使わないで「児を背負ふ若き青年汗拭う」と。

「育メン」じゃダメかしらね？（笑）

子リスたち午睡の母を飛び越えて

石山…子リスの生態をよく捉えていて確か。健やかな成長、命の賛歌。「昼寝覚親とび越える子リスたち」の方が自然。

どこに問題があるかを検討

透き通る水琴窟の美しき音

石山…水琴窟は季語ではない。水琴窟といえば、透き通る、美しき音は言わなくともわかる。

籐椅子の老友去りて雨戸閉づ

石山…親しく語り合った刻の終焉を「雨戸閉づ」の中に表現しているが、「老友」とは言わない方がいい。「老」を使うことはもちろんあるが、読んだ人に暗い印象を与える。暗い中にも希望があった方がいい。

確かに「老友」と言わなくとも、若い人でないことは句意から伝わってくる。

早苗植ゆ幼の指に光さす

飛び交うて青葉を揺らす鳥の声

石山…一句の中に動詞は一つ、が原則。2つになると焦点が分散する。

「幼子の指にも一本早苗植ゆ」

「鳥翔ちて青葉若葉の風立てり」ではどうか。

石山雅之秀逸三句

十薬を食みて長寿の象はな子

十薬を食む象はな子皺深く

緑さす雨情旧居の松大樹

★代表の田中さんは常に笑顔で早口でカラカラと笑う。それにつられてか、皆さん明るく、あちらこちらで違う話題に花が咲く。初めて知ることも「そうそう、何でも勉強よ！」と屈託がない。会の一人がパソコン教室の先生でもあり、投句はすべてメールで提出。締切りの夜中ギリギリに送ってくる方もいるそうだが、それでも続けていくのは仲間がいて、ここにくると元気になり、新しいことを知るという喜びがあるから。来月は「武者小路実篤記念館」での吟行会。「あなた場所わからないの？じゃあ迎えにいくわ」の声が弾んでいた。

（木戸敦子）

早川義郎様
「墓標探しの旅 ―私の韓国旅行記―」
（東京都・文京区）

昨年11月、5年前の『ザビエル画像の謎について』につづき『墓標探しの旅』を出版された早川義郎さまにお話をお聞きしました。

▲笑顔がバッチリ！「よければ葬式の写真に使うから」とユーモアたっぷりの早川さま

Q どうしてこの本を？

もともと私も妻も大の旅行好きでしたが、裁判官の現役時代は忙しくてその暇がなかった。そこで5年前倒しでこの仕事をやめて、以後、ヨーロッパを中心に40回ほど海外への旅に出た。事前に下調べをし、帰国したら見聞したことを忘れないよう、極力早く旅の記録を書き残すようにしていた。幸い、法曹界には「法曹」、「窓」などの親睦誌があり、そこに掲載してもらえるという張り合いもあった。職業柄、ものを早く書く、簡潔に書く、という修練を重ねてきたこともあり、旅行記を書くことはまったく苦にならなかった。友人には「旅行記を書くために旅行をしてるんじゃないか」などとからかわれたりもした。量がたまると、欲が出て一冊の本にまとめたくなってしまう。

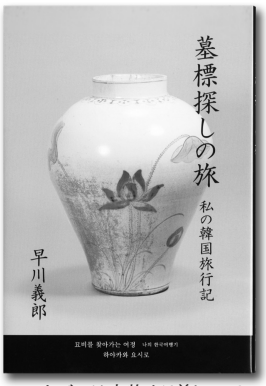
Q 韓国にはもともとご興味が？

韓国に対しては食わず嫌いのところもあり初めて行ったのが2007年。妻の祖父が朝鮮総督府の役人だったこともあり、亡くなった義母が、かつて青春時代を送ったであろうソウルに足を運んでみようという、一種のセンチメンタルジャーニーだった。一度行くと現地の人の親切さ、情の濃さにまた足を運びたくなり、以後、隣国の目覚ましい発展ぶりを知りたい、日韓交流史の跡を現地に確かめたいという思いもあり、都合6回にわたった旅の記をまとめたのがこの一冊。

Q『墓標探しの旅』とは？

妻と韓国に行ってみよう、という話をした翌日にちょうど「旅行代金19800円！　週末ソウル3日間らくらく…」という新聞広告が目にとまり、いの一番に申し込んだ。ところがあとでよく見ると「らくらく便利な羽田発着」とあり、決してらくらく便利な旅ではなかった。参加者は午前3時に空港集合、週末を利用した若者向きの強行軍のツアーだった（笑）。まさに「弾丸トラベラーズ・イン・ソウル」。この一回目の旅に始まり、一番印象深い3回目の旅の題名を本のタイトルに据えた。口の悪い連中は、「とうとう早川君も自分の墓を探す旅に出るようになったか」と思ったそうだが、この墓標とはいつか訪ねたいと思っていたソウル郊外の忘憂里に眠る浅川巧の墓のこと。彼は、朝鮮の青磁や民芸品の美しさを日本に伝え、朝鮮の人たちに溶け込み、40歳の若さで肺炎のため朝鮮の土となった人物。

それもあって、表紙カバーには彼の愛した「青花辰砂蓮花文壺」の写真を使用したが、上品で格調のある美しさがよく出ていて、おかげで評判もよく、このカバー写真のおかげでみな本を手にとり、ちょっと読んでみようかなという気を起こしてくれたらしい。



▲カバーは実物より美しい!?「青花辰砂蓮花文壺」

Q もともと裁判官に？

昔から不正を許せない一種の正義感があり、是是非非な生き方をしたかった。会社などに入ると、そうはいかないこともあり裁判官を目指した。以来、刑事事件を中心に退職まで35年、休日返上で、仕事三昧の毎日だった。仕事柄、万事証拠に基づいて判断するという、事実認定のクセが今でも抜けない。前作の『ザビエル画像の謎について』は、美術史における事実認定という問題に取り組んだエッセイ集。美的センスはゼロだが、美術史の世界も権威主義が強く大先生がAと言えば、弟子は反論できず、それが通説としてまかり通ることがままある。この誤りを証拠に基づき論証するのが実におもしろくやめられない（笑）。

Q これからは？

今、妻の具合が悪く外国旅行ができないので、「韓国旅行記」の延長として、江戸時代に12回日本に来ている外交使節「朝鮮通信使」がたどった足跡を訪ねる旅を始めてみた。めぼしいところを回るだけでも、まだ2年くらいかかりそうだが、その旅行記が出来上がったら、またよろしく（笑）。

★都立小石川高校を経て、東大在学中に司法試験に合格したという早川さま。ご本人いわく「祖父はタバコ屋で、小商人の小倅の血が流れている」とあって、神田生まれの生粋の江戸っ子の素顔は、ユーモアにあふれ楽天的で庶民的。物にならない語学お宅の面もあり、現在は韓国語とイタリア語を勉強中とか。「話すときは、構文を暗記してしゃべるから90％通じるけど、相手の言っていることは10％もわからないのよ。冗談も暗記して、それを言いたくて会話もその方向にもっていくし（笑）」とは奥さま談。いつも傍らにいる名コンビなのだ。奥さまが一日も早く快癒され、また婦唱夫随の弾丸トラベラーズと化すことを祈っています。

（木戸敦子）

投稿作品

※誌面の都合上、投稿作品の掲載は先着300名様までとさせていただきます。何卒ご了承ください。

俳句

1 サンタルチア原語で歌う夏館
眞下幸枝（埼玉県）

2 削ぎ落す木肌に触れる夜の秋
日下温水（東京都）

3 地下水でミネラル多き夏料理
須澤重雄（長野県）

4 臆面もなき人とゐてまむし酒
環順子（東京都）

5 落椿雨にたたかれ並べられ
水落重弐（新潟県）

6 梅雨たのし小さき庇をもつポスト
西口東治（大阪府）

7 訪ね来て夏草ばかり軍跡
堀井酔人（茨城県）

8 考妣を待ち戸を開放つ蛍の火
星野三興（新潟県）

9 紺碧の海を越え来し江戸切子
橋本良子（埼玉県）

10 あぢさいをほめて垣根の立話
芋木匡子（滋賀県）

11 木の国の柾（まさ）の名残や鰆串（はたくし）
土谷敏雄（秋田県）

12 ソラマチや巡る街筋五月晴
野村牟人（東京都）

13 君子蘭咲きて栄華をほこりけり
小井寒九郎（三重県）

14 ハンモック風の機嫌を聞いてをり
川口襄（埼玉県）

15 瀬戸風鈴山門前の蕎麦処
中西秀雄（東京都）

16 薫風を窓より入れてキー叩く
藤沢樹村（東京都）

17 吊り橋を渡り切れずに梅雨深む
早矢仕邦夫（愛知県）

18 佐渡の朱鷺飛行訓練初夏の朝
佐瀬千恵子（神奈川県）

19 みちのくに送らむ越の笹粽
竹本芙美子（新潟県）

20 大成の醜名と同じ桃を買ふ
関根千恵（埼玉県）

21 癌に勝ち髪を抜かれし夏帽子
鈴木与平（宮城県）

22 慈悲深き千手観音緑濃し
道給一恵（埼玉県）

23 山国の兜造りや麦の秋
佐野和彦（静岡県）

24 齢して変らぬ好み冷奴
内河邦久（東京都）

25 雲間より金環日食夏の朝
小形さだ（東京都）

26 冷房の効かざる歯科の受診待つ
紺谷睡花（東京都）

27 梅雨に入る育つた生家まだ売れず
福田和子（東京都）

28 城跡は過去を語らず夏椿
林　克（福島県）

29 晩学の実らざる稿花うつぎ
有坂馨園（福島県）

30 蒲公英の穂絮任地は風任せ
居原田連星（大阪府）

31 ひなげしを心ゆくまで摘んできし
須田洋子（埼玉県）

32 老鶯のトホホホと鳴きそれっきり
鈴木岑夫（千葉県）

33 合歓の花故郷の山河遠きかな
井原毬子（東京都）

34 いつまでもさよならはなし大文字
阿部至（埼玉県）

35 父の日や語りたきことまたひとつ
川嶋法子（東京都）

36 ふる里の山河呼ぶ声初つばめ
堅田秀子（東京都）

37 お隣りも入道雲の栗の花
青木日出男（群馬県）

38 カプセルに原発のこと卒業する
山崎吉晴（群馬県）

39 たわむれの海酸漿の紅かなし
稲垣恵子（埼玉県）

40 空も山も人も映して植田かな
沢田稲花（山形県）

41 冷奴先の禿びたる夫婦箸
今井勝子（新潟県）

42 たらちねの母在るごとき白牡丹
松嶋光秋（東京都）

43 路地中のお稲荷さんに枇杷熟れる
服部八重子（東京都）

44 幾何学はお手のものなり女郎蜘蛛
吉村充治（埼玉県）

45 青嵐「ガ」行で啼きし白孔雀
竹澤茂子（大阪府）

46 平安の蛍舞ひ継ぐ河内國
三津木俊幸（千葉県）

47 夏の雲山にみたてハイキング
神作洸江（埼玉県）

48 探しもの出でて一息風みどり
堀木和子（大阪府）

49 語り部のまたひとり逝く原爆忌
田中昶（鳥取県）

50 耳遠くなりし人生雨季に入る
炭崎博（滋賀県）

51 深緑に滝の飛沫や湯殿山
松尾らん（東京都）

52 かもじ草路傍に伸びて蝶が来て
木下精（大阪府）

53 洗い髪心の澱も流したし
阿部徳夫（宮城県）

54 女郎花男むんずと手折りゆく
吉田未灰（群馬県）

55 衣更フリルのそよぐ交差点
白井昭子（埼玉県）

56 落日の麓灯せし山法師
杉原明子（静岡県）

57 桑の実の紫紺に天気定まらず
今井岩夫（千葉県）

58 右に飛び左に流れ蛍川
渡辺茫子（千葉県）

59 メモとりし友の指先夏ひざし
山田幸代（兵庫県）

60 老いの坂下るのもよし桐の花
木田亜津子（兵庫県）

61 傾くや小雨に濡るる濃あぢさゐ
川崎洋吉（福岡県）

62 駅迄はおしろい花の端歩く
忍正志（兵庫県）

63 春風の色の絵の具をさがしけり
河合ヤスエ（大阪府）

64 母の日の母が戦の話など
岩永登茂子（大阪府）

65 清楚なり天空に笑む山法師
佐野しづ子（愛知県）

66 花の名をそくざに答う聖五月
佐藤昌子（新潟県）

67 紫陽花や、湿りありベビーカー
松尾康代（東京都）

68 荒川の土手駈け上る跣の子
三ッ木宗一（東京都）

69 喜怒哀楽さらりと流しところ天
橋本世紀男（東京都）

70 原因を知るや安堵の新酒酌む
緑川禎男（埼玉県）

71 遺書書く右手突けり枯蟷螂
加用章勝（千葉県）

72 賢母には成れず仕舞ひのキャベツかな
大曽根育代（埼玉県）

73 薔薇風呂でリッチと話す寡婦若き
大橋恒次（新潟県）

74 ひるがほにはるかえんとつ沼垂かな
安部哲（新潟県）

75 雀踊りの扇振られて蝶になる
鈴木蝶次（宮城県）

76 鶴の噴水人無き時も水上げて
山﨑ゆき（東京都）

77 寅彦の花椎匂ふ通学路
古谷力（東京都）

78 鈴虫の音や戻らぬあの幼き日
渡邊昭雄（東京都）

79 ひとりでは生きられないと一本松
棚橋麗未（東京都）

80 舶来の桜桃かなし黒なづむ
千代田栄次（東京都）

81 一本づゝ皆にくばりたしカーネーション
副島加代子（宮城県）

82 三竦（さんすくみ）変声期めく青蛙
田島星景子（宮城県）

83 夕餉すみ足むくままの夕涼み
阿部幸子（宮城県）

84 紫のあじさい賞でる梅雨の入り
鈴木みえ（長野県）

85 初夏の寺社を巡るも志
原田麦吹（埼玉県）

86 ふと見れば紫陽花の鞠雨曇り
西條公雄（埼玉県）

87 反り合わぬ二人の縁冷奴
長峰正晴（千葉県）

88 いつまでも幼童のまま合歓の花
浦橋渇雪（兵庫県）

89 昼寝覚め貧乏神が這い上る
辻升人（東京都）

90 絆かな染井吉野と花水木
田野倉訓郎（東京都）

91 梅雨近し珈琲の香に渦の花
星一子（神奈川県）

92 誉られも謗りもされず青芒
岩村昇（神奈川県）

93 風光るグランドゴルフの球走る
杉村美保子（岩手県）

94 時の日の時を想えば母恋し
井上静夫（栃木県）

95 六月や歌舞伎名跡継ぐ男
布目雅之（埼玉県）

96 紫陽花の咲き足元の土乾く
高杉杜詩花（北海道）

97 念願の函館夜景夏の旅
柳澤京子（宮城県）

98 古民家に今を盛りと凌霄花
青木ケン子（埼玉県）

99 教会の花嫁初いしうすごろも
堀田寿美子（北海道）

100 仏具屋の店主いなせに凧いくさ
小林七重（新潟県）

101 白菖蒲気高く咲くをネズミ見る
白戸麻奈（東京都）

102 夏蝶や双手游がせ一輪車
山本直子（大阪府）

103 句歴だけ長き身弱し蝶生る
中嶋清子（佐賀県）

104 濃あじさい雨滴の彩を染めにけり
中田文子（大阪府）

105 母の日の母を囲んで祝ひ宴
大久保アヤ子（東京都）

106 病葉を踏みて球場遠くあり
村上千代（大阪府）

107 若葉萌ゆ楠の大樹や義父の葬
長野光康（神奈川県）

108 今日のこと今日で終らせ半夏生
宇田川正雄（埼玉県）

109 青田波大揺れ小揺れ学童帽
村木友光（埼玉県）

110 廃屋となりし牛舎に草茂る
山本吉夫（三重県）

111 碁盤目の植田に鷺が句点打つ
濵田イサオ（福岡県）

112 少しづつ減りゆく会話梅雨の夜
髙崎登喜子（東京都）

113 藤の花褪せても好きな藤色で
中山日出子（大阪府）

114 隅田川玉や鍵やで川開き
山本善輔（兵庫県）

115 すみだ川競う夏雲スカイツリー
磯山陽吉（東京都）

116 菖蒲（あやめ）見に来た園児らが三十名
延原令岱（岡山県）

117 抜けてゆく体の力ハンモック
檜山とり子（東京都）

118 胃を捨てて歩む十年雲の峰
坪田勝秀（鹿児島県）

119 ユッカ咲く頃通勤駅の西ケ原
有田裕子（北海道）

120 梅雨入りの句繕ひし独り言
油谷郷史（兵庫県）

121 目つむれば葉ずれやさしき鑑真忌
池本勇（大阪府）

122 木霊して茶店へ半里山法師
上村元義（神奈川県）

123 再診の葉書バックに梅雨晴間
森川千英子（千葉県）

124 いつの間に緑一面散歩道
針生清（千葉県）

125 梅雨雲の窓辺に張りつき退院日
藤井春三（埼玉県）

126 泌尿器科たんぼ埋立行々子かな
北野耕兵（千葉県）

127 老壮の熱気溢れる祭りかな
齊藤安弘（神奈川県）

128 重ね咲く四葩の雫こぼし剪る
藤田照代（岡山県）

129 ひともとといふは寂しき花葵
岩橋千代子（北海道）

130 黒潮の潮目際立つ麦の秋
宮川昭男（高知県）

131 伽羅蕗のほろりと苦し蛍の夜
井上氣海（広島県）

132 靖国の鳩は真白く若葉風
名取美枝子（千葉県）

133 緑気層々むかし学び舎山くだる
菊池シュン（青森県）

134 薫風やベットに礼し退院す
大場きよし（宮城県）

135 サボテンの一日花とて燃ゆる色
大阿久雅子（東京都）

136 涼風や楷樹のさわぐ孔子像
大谷伊佐男（埼玉県）

137 潮風に浜昼顔の花ゆれる
中村和弘（愛知県）

138 汗ひかる雀踊りの少女かな
浅野信廣（宮城県）

139 里人を見下ろす古城青葉山
田野井一夫（栃木県）

140 夏雲の阿形のごとく湧き上がり
磯部力（新潟県）

141 ほろ酔うて苔の花みる法善寺
増本和子（大阪府）

142 紫陽花を名付ける白居易相聞歌
津田忠彦（岡山県）

143 青嵐「わが母の記」の子の電話
冨樫和子（山形県）

144 慰霊の日沖縄だけですむものか
福岡悟（東京都）

145 緑蔭のここが私のカフェテラス
清水喜代子（岡山県）

投稿作品

146 真夜中にてっぺんかけたか時鳥
小山和香（大阪府）

147 万緑や入日華やぐ池の面
長谷部喜代子（大阪府）

148 花影に駄作をひねる余生かな
柴田恵美子（北海道）

149 網戸開けまことの夜風入れにけり
五十嵐勝敏（新潟県）

150 薫風や老々介護和みたる
仁藤ひろじ（埼玉県）

151 縁日に競ひて鳴りぬ江戸風鈴
秋谷静子（茨城県）

152 虹渡り亡夫待つ天にいつの日か
岡村君枝（茨城県）

153 雑草の伸びゆく早さ追ひつかず
橋本まこと（栃木県）

154 子の手より光のすじと鮎昇る
大塚徳子（埼玉県）

155 点滴の窓辺忙しき燕の子
小野寺裕子（宮城県）

156 風神の忘れ衣か懸かり藤
西川孝子（奈良県）

157 かりかりを保てる手順梅漬くる
青木涼子（埼玉県）

158 緑さす障害児らの生活村
倉岡依世（東京都）

159 邪魔をしないでいま万緑と交信中
池田岬（埼玉県）

160 青梅の届きふるさとありにけり
石崎ひろ美（神奈川県）

161 高値つく被災の海の初鰹
小山たけし（埼玉県）

162 羽抜鳥王候貴族のごとくあれ
湯浅夏以（神奈川県）

163 つたう児の一歩は広し夏座敷
前川和市（兵庫県）

164 あじさいや色のパレット土の中
石川郁子（埼玉県）

165 虫の声雨の中でもきこえたよ
高松愛（神奈川県）

166 何ごとも加齢のせいと竹酔日
中野豊彦（東京都）

167 夏うぐひす墓に定年申すかな
大窪美代子（大阪府）

168 時の鐘渡る蔵街燕の子
寺尾令子（東京都）

169 湿りありまだ柔らかき落し文
津布久信雄（東京都）

170 水馬の雨の輪に入るビオトープ
細淵勝子（埼玉県）

171 扁額に墨客の筆七変化
村上克哉（東京都）

172 夏木立夢のごときやルビー婚
井田由利子（宮城県）

173 鎌砥ぐやさつくりと伐る秋田蕗
佐藤信（神奈川県）

174 玻璃の壺過去が宿りし水中花
石井美智子（埼玉県）

175 山独活を採らんと装束大仰に
重原昇（新潟県）

176 つばくらめ巣造り無くば寂しけり
森崎榮久（岡山県）

177 七夕や二度と出会へぬ人もあり
羽根田明（神奈川県）

178 十薬の束干す得意老いの顔
神一男（静岡県）

179 学ぶとは生きることなり青嵐
山崎鶴恵（鹿児島県）

180 万緑や大樹の並木はプラタナス
勝田久美（大阪府）

181 半夏生荷下ろす背の湿りけり
吉澤昌美（長野県）

182 草笛の少女友待つ峡の朝
邑橋節夫（兵庫県）

183 奉加帳歩いて回す梅雨晴れ間
日根野昭治（大阪府）

184 生きてゐる証夜涼を楽しめり
藤田三四郎（群馬県）

185 夏岬過去へ過去へと波立ちぬ
早乙女文子（埼玉県）

186 岩清水除染の鎌の水鏡
菅井文男（新潟県）

187 老い支度ブランドものの夏ベッド
袖山美峯（東京都）

188 混浴の熱き山湯や蝉しぐれ
野中信夫（東京都）

短歌

189 雑草に追われる日々を楽しみつ薺の花
のペンペンに笑む　田中豊恵（新潟県）

190 とりどりの嫁の料理は有難し日々健
やかに老いと闘う
野木宗信（奈良県）

191 鱯は叫ぶムンクの声あげて浜に干さ
るる大いなる口　久保和友（滋賀県）

192 キササゲを見る度浮かぶ左千夫の墓
「アララギ」誌友等とかの日詣でき
木暮珣子（群馬県）

193 朝ドラの梅ちゃん先生我が余生残り
命を確かめてくれ
齋藤忠弘（千葉県）

194 旅思う不安と自由のはざまにてメタ
セコイヤに胸ときめく
福原喜恵子（群馬県）

195 平成の龍馬を気取る若き獅子独裁も
よし橋下維新　大竹憲弥（新潟県）

196 一代を働き終えて子等見れば時代に
従いて働き遊ぶ　高須孝（愛知県）

197 ぼろぼろの居座る原発そのままに再
稼働いそぐ大飯原発
黒澤正行（福島県）

198 五月晴れスカイツリーにかけのぼり
東京帝都を眼下に納む
図子利明（兵庫県）

199 七色の夢追い人の虹の橋幸せもとめ
渡るはたれぞ　阿部澄江（宮城県）

200 北信濃湯の里野沢で晩年の病癒せし
忠次の地蔵　山本敏順（長野県）

201 羊らの草喰む音の聞える絵羊のごと
く優しく生きむ　土屋喜雄（山梨県）

202 あきらめてできることだけ感謝す父
亡き後に伯母介護して
大橋絵代（千葉県）

203 雨濡れの艶めく四葩あぢさゐや袖透
く月にしばし佇み
濵田深雪（新潟県）

204 妻臥して天下捕ったと庭の草空き家
の如く我を責めおる
野中よしみ（神奈川県）

205 なだらかな山の彼方に陽の登る日食
告ぐや犬の遠吠え
佐野澄江（山梨県）

206 たんぽぽのような傘の列が行く春雨
けむる登校時間　寒川靖子（香川県）

207 昼の月がゆっくりしましょうと宇宙
より人間の皆さま戦さしないで
暉峻康瑞（鹿児島県）

208 ホームにて金環日食まるごと見る愛
しきヘルパー支えくるれば
今井忠一（東京都）

209 梅雨晴に二輪車を漕ぎデパートへ散
歩も兼ねる本の立読
栗原黎（群馬県）

210 どこまでがホンネかウソか分からざ
るサスペンス・ドラマ政治家の謂
篠原三郎（静岡県）

211 はつ夏の水に遊べる汝が指のあやめた
きまで濃きみどりする
北岡晃（兵庫県）

212 他人事どうでもよいと思いつつ退院の
嫗のその後知りたし
熊谷ルミ子（埼玉県）

213 喜寿越せば身の節々の痛めども年齢のせいだと諦め早む
椎忠夫（神奈川県）

214 活字まで寄せて離して持つルーペひとつ増したるわが必需品
山内寿子（京都府）

215 早苗田のそよぎ懐かしつばくらめ縁起まち待つわが家軒下
西山悌三郎（高知県）

216 青年は畏まりつつ「智香さんを下さい」我が目うるうるとなる
佐藤政實（埼玉県）

217 父の日のおみやげかかえ夫笑う通所歴は丸七年
濱崎祥子（鹿児島県）

218 松田梨子わこちゃん姉妹の短歌（うた）が載る初心な感性の掬いし言葉
桑原謙一（群馬県）

219 日薬が効くと聞かされ朝を待つこの悲しみは幾時消へ去るや
音喜多千津子（埼玉県）

220 雑草の育たぬ畑は畑じゃない言われて戦かふ二十と五年
吉野成行（愛知県）

221 空しさよ去らば去れかしひたに聴く軽きサウンドポール・モーリア
萬濃その子（神奈川県）

222 南天の花粉たまゆらこぼれたり初夏の風そよぐともなし
緑川葉子（福島県）

223 眞青な空雀らの電線にチョチョチョチョラチョラ楽しくはなす
佐々木都（長野県）

224 夕餉にと夫の作りし小松菜でごまあえ煮びたしスパゲテー
田中迪子（東京都）

225 田起こしをなす耕運機のその後に餌を求めて白鷺集ふ
増田信雄（埼玉県）

226 骨折で孫の襁褓を口で干す後姿の姑の六月
森ふく（千葉県）

227 祭壇にあじさいの花あまた活けペンテコステの第一主日
髙橋邦子（高知県）

228 功成った同輩数多同窓会出番なき吾末席に流れ
村岡盛英（群馬県）

229 紫は万葉のいろ君の色藤草を摘む磐余の道に
今井温子（奈良県）

230 盆明けの刑務作業の八時間を長袖シャツの我は働く
川崎貴行（熊本県）

231 緑野にオセロの如く並びたる白と黒とのロール牧草
釣本峰雄（北海道）

232 子を寝かせやうやく得たる午後なれば定まらぬまま時は過ぎゆく
小川和恵（新潟県）

233 小生は何んの為に生うけた未だ分からぬ古希過四年
辻忠城（東京都）

234 西の方南ア連峯雪残し盆地の夏を飾る由なり
畑克明（山梨県）

川柳

235 未知数をいっぱいに抱くもみじの手
五十嵐修（東京都）

236 野に若葉ゴルフ優勝日本晴れ
守屋高雄（岩手県）

237 ゴキブリを退治男の株を上げ
中嶋秀次郎（埼玉県）

238 わたし達百才までと笑いこけ
石原 岳（群馬県）

239 日本人茶柱立つと嬉しがり
羽田桐柳（群馬県）

240 行者菜は暑さ寒さに効く強さ
工藤昌見（山形県）

241 片べりの靴が嗤いに堪えている
松田重信（埼玉県）

242 最高のミックスジュース作りましょ
岡本恵（茨城県）

243 日本人週に三回休めれば
大川聡（新潟県）

244 「震災」という名の雨や今日の空
安木沢修風（新潟県）

245 世渡りも本音建前使い分け
原田英一（千葉県）

246 大きな口空けてつばめに似る曽孫
大江秋月（兵庫県）

247 野球より視線はいつもチヤガール
山崎一嘉（愛媛県）

248 ドーンと娘にデートの誘い春がくる
小山恵美子（大阪府）

249 遊び下手昭和一桁屋台酒
久本にい地（岡山県）

250 平仮名で叱ればみんな素直な児
北村純一（神奈川県）

251 鮎の骨抜き　ネクタイをすっと取る
丸山芳夫（東京都）

252 辛抱も我慢も知らぬ子の主張
藤沢健二（千葉県）

253 贅沢にさしみのトロを舌つづみ
近藤はつみ（福岡県）

254 青い空きっと明日はうまくいく
井上美恵子（愛媛県）

255 打って出る駒を一つは持っている
高柳閑雲（愛知県）

256 縄のれん愚痴を聞き聞き二日酔い
諸橋文男（新潟県）

257 持ち寄りでひととき学んだあとのお茶
藤井碩子（山口県）

258 黄保険届いて万病痛み出し
佐伯セツ子（香川県）

259 真実を話せば傷が深くなる
大岩歌子（岡山県）

260 縒りがきて離れられない夫婦岩
楠瀬美香（高知県）

261 嬉しいな今日から猫のお母さん
鈴木青古（茨城県）

262 元気よく歌う園児の顔がいい
松田義登（福岡県）

263 原発と快適さとを天秤に
奥那於子（大阪府）

264 自販機のこころ響かぬありがとう
高松秋良（群馬県）

265 孫娘嫁いだ先きは大都会
高井逸代（岡山県）

266 子のこととなれば夜叉にも菩薩にも
竹村穏夫（大阪府）

267 つまずいた段差のほどに老いを知る
藤井北灯（福岡県）

268 物不足だけ思い出す終戦日
鈴木義雄（福島県）

269 地から湧き天から降った罰いくつ
三輪美智子（兵庫県）

270 好評と破れた旗の立つ売地
中林恵子（大阪府）

271 センサーが相棒になる老いの日々
石山幸枝（新潟県）

272 こころがこころに零す言の葉夕焼けす
長尾俊彦（香川県）

273 ハイチーズ遺影のポーズできました
田澤宏（新潟県）

274 独り酌む酒で鎮める胸の渦
安田翔光（香川県）

275 アンコ跳ね冷水浴びた鯛焼店
守田貴久（東京都）

276 ショートケーキ乗った苺を比べてる
鈴木章（新潟県）

277 念ずれば叶うと信じ引くみくじ
岩崎令子（大阪府）

278 月末になると家計簿喋り出す
鏡たか子（山形県）

279 どこまでも一緒なんだと言い聞かす
杉浦芭童（愛知県）

※訂正6月号掲載の248番、濱崎登喜子さんは高崎登喜子さんの誤りでした。深くお詫び申し上げます。

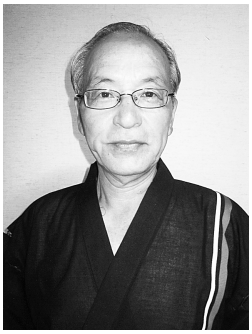
6月号の心に残った作品

「投稿作品で心に残ったものは?」の問いに、たくさんの回答をお寄せ頂きありがとうございました!その中で特に多くの評価を集めた作品と、それを選んだ理由の一部をご紹介します。

《大賞》

240 桜咲き小さき村を膨らます

湯浅芳郎(岡山県)



湯浅芳郎様

・「小さき村を膨らます」がうまい。さくらの元気を貰う村もいよいよ、多忙とたたかうのですね　鈴木岑夫(千葉県)・村中の人々の静かな喜びがつたわって来るようです　川嶋法子(東京都)・農村の春景色が絵のように目に浮かびます　棚橋麗未(東京都)・過疎になってゆく小さき集落も春を迎えると花万開希望に膨みます。帰省する人観光に来る多勢で賑やかになる一時　原田麦吹(埼玉県)・どこの村にも名木と言われる木がある。桜が名木のこの村、この時季人が集まる　延原令岱(岡山県)・まさに我ふる里。「女王」とも言われている桜の季節のみ賑わい報道、放映され村の存在を改めて知らされます　森川千英子(千葉県)・人の声のしない村に桜咲き賑やかさが戻った様子　藤井春三(埼玉県)・村いっぱいの桜、大勢の見物の客で村も膨れたことに賑わいが目に浮ぶ　岩橋千代子(北海道)・桜の木も花の頃になると絶大な存在感があり、下五の膨らますが佳い　池田岬(埼玉県)・私の故郷も過疎が進み廃家、廃校の校庭の土手には桜が咲き満ち、どの道を通っても花明りに膨らみます　重原昇(新潟県)

【自句自解】

小生の住む村は、岡山県の北部、豊かな緑と清流の渓谷にある小村である。宿場桜と言う桜並木がある。桜の開花は遅い。開花に合わせ祭りがあり、伝統の太鼓の演奏や創作てまり作品展などが開かれ、多くの人が村を訪れる。その期間、村も賑わい、村人の顔も平生より心なしか綻びている。周りの風景も人の心も全てが少し膨らんで豊かに感じられる。この土地の自然や自然に寄り添い生きる人々を地道に詠う句作りに精進したい。

《短歌》

35 生れし日は愛たっぷりの名のはずが
指名手配の張り紙に雨

後藤美佐子(長崎県)

・この冊子の届いた日にオウムの高橋逮捕のテレビニュースを見た。親の心ここにあらず…か?…　佐伯セツ子(香川県)・最近の事件、事故の度に親の立場を思うと胸が痛みます。あまりに悲しい　森ふく(千葉県)・好きで罪を犯す人はいないのに手配書をみるたびにいつもながら複雑な思いになる…張り紙に雨がよい　岩崎令子(大阪府)・指名手配写真を見るたびに親のつらさを感じます　釣本峰雄(北海道)

《川柳》

48 震災をしずめる神がほしい国

工藤昌見(山形県)

・「震災」はいまや「経済」と共に2大テーマであります　安木沢修風(新潟県)・揺れる日本列島に実感する　栗原黎(群馬県)・岡山県は割合に災害が少ない県と思っていましたが春以来次々と災害があり、また日本全国でも震災以後地震、水害、雪害、竜巻と続く災害、しずめる神が欲しいです　大岩歌子(岡山県)ほか

《俳句》

123 物忘れしながら生きて花は葉に

阿部徳夫(宮城県)

・自分のことを云われているような感じ。刻の流れのはやさも感じます　井原毬子(東京都)・今の私です。花が葉になると何にか落ち込む　山崎吉晴(群馬県)・物忘れと言うと直ぐ高齢者と思われがちですが、そればかりでなく思えば、その齢(よわい)ごとに、つらいことやいやなことを記憶から抹消しながら生きているのだと思う。それさえも忘れて人は生きて行く　稲垣恵子(埼玉県)・長生きの秘訣 大曽根育代(埼玉県)・自分のことを詠まれている感じ。気持がじんと伝わってきます　鈴木蝶次(宮城県)・毎日の自分に重ね月日の立つのが早いです　青木ケン子(埼玉県)・物忘れに悩んでいますがこの句のように自然体の中で生きて行こうと思いました　中山日出子(大阪府)

226 草餅や野良着の似合う嫁となり

岡村君枝(茨城県)

・農業に携わって下さる若いお嫁さんに拍手をおくりたい　竹澤茂子(大阪府)・農業を継ぐ人が少なくなってゆく中良く嫁いでくれました。野良着の似合う姿がよく伝わる句です。草餅もぴったりです　三津木俊幸(千葉県)・嫁さんをみている御主人の笑顔も見えてくるようです　北村純一(神奈川県)・今どき珍しい嫁さん、季語が合っている　阿部幸子(宮城県)・姑さんのやさしく思う気持ち。野良着が似合うお嫁さんは仕事にもなれて来たのでしょう　堀田寿美子(北海道)・やっと農家の嫁になってくれた　山本吉夫(三重県)・語呂の流れも良く、そこに立ってる若い人妻の姿が見える、草餅造りも上手になっていよう　森崎榮久(岡山県)

《他にも》

10 ガレキさえ受け取り出来ず押しつけて何が絆か天もあきれる

齋藤忠弘(千葉県)

27 しあわせと云う名の村に夫と来て共共喜寿を迎へたる朝

今井温子(奈良県)

51 もう傘寿まだまだ捨てぬアンビシャス

藤沢健二(千葉県)

55 晩年の望みは現状維持となり

守屋高雄(岩手県)

79 わが心浄土と地獄併せ持ち

増島淳隆(東京都)

90 今年こそ朱鷺もときめく春の風

鈴木章(新潟県)

106 春愁ふボタン一つの掛け違い

長峰正晴(千葉県)

138 ドーナツの穴の向かうの春愁

遠藤和彦(埼玉県)

※今後もふるってご投稿をお願いいたします!

前回のアンケート

★たべもの・のみもの

ぽっぽ焼

・新潟名物「ぽっぽ焼き」
若月理依子(新潟県)、田澤宏(新潟県)、小川和恵(新潟県)、織田亮太朗(新潟県)ほか

かき氷

・シロップのかき氷
赤よりシロップが高かった。味も上等
青木日出男(群馬県)

・村祭り屋台のカンテラの明りとカーバイトの匂いが　藤井春三(埼玉県)
・夏祭りの思い出…。かき氷、それもいちご味です
名取美枝子(千葉県)
・カキ氷を食べたこと。私達の子どもの頃はめずらしいものでした
中村和弘(愛知県)
・氷いちご　舌が赤くなったのを見せ合って　中林恵子(大阪府)
・遠くより歩いていって食べるかき氷がなつかしいです　田中豊恵(新潟県)
ほか、道給一恵(埼玉県)、山田幸代(兵庫県)、近藤はつみ(福岡県)、山本吉夫(三重県)、熊谷ルミ子(埼玉県)、藤田照代(岡山県)、井上氣海(広島県)、田野井一夫(栃木県)、棚橋麗未(東京都)、桑原謙一(群馬県)、邑橋節夫(兵庫県)

アイス

・冷たくてあまりの甘さにたまげたものです　齋藤忠弘(千葉県)
・サッカリン味のアイスキャンディー
大曽根育代(埼玉県)
・ぼんぼん（シャーベットのアイス）
福岡悟(東京都)
・小さい頃近くのお寺の境内に並ぶ夜店でキャンディやヨーヨーを。帰りには疲れて姉の背中におんぶしてもらった記憶!!　池田岬(埼玉県)
ほか、津布久信雄(東京都)、細淵勝子(埼玉県)、伊藤正子(愛知県)、有坂馨園(福島県)、羽田桐柳(群馬県)、暉峻康瑞(鹿児島県)、古谷力(東京都)、柳澤京子(宮城県)、野中よしみ(神奈川県)、佐々木都(長野県)、津田忠彦(岡山県)、延原令岱(岡山県)

綿あめ

・千切っては口に入れ、溶け出した甘味が何とも…　布目雅之(埼玉県)
・棒の頭（箸の先）に口(くち)は「キケン」と注意された　千代田栄次(東京都)
・仕事帰りの夏祭り、今は亡き父からのお土産も綿あめでした
大橋絵代(千葉県)
・子供の頃綿菓子を自分でやらせてくれるのがやりたくて必ず買っていた　長峰正晴(千葉県)
・少女時代は鹿児島市におりました。綿菓子といいました
大窪美代子(大阪府)
・人混みでペシャンコになった哀しさ、今も忘れられません
寺尾令子(東京都)
ほか、須田洋子(埼玉県)、井原毬子(東京都)、吉田未灰(群馬県)、土屋喜雄(山梨県)、木田亜津子(兵庫県)、中嶋清子(佐賀県)、松田義登(福岡県)、檜山とり子(東京都)、石崎ひろ美(神奈川県)、石川郁子(埼玉県)、服部八重子(東京都)、福田和子(東京都)、川嶋法子(東京都)、堅田秀子(東京都)、佐野しづ子(愛知県)、水落重弐(新潟県)

はっかパイプ

・今はあるのでしょうか。息子が幼い時は「お面」でした
紺谷睡花(東京都)
・はっかパイプは懐かしい匂いだ
小山たけし(埼玉県)
ほか、佐藤昌子(新潟県)、鏡たか子(山形県)

りんごアメ・あんずアメ

・リンゴ飴…年老いた今でも、夜店で買ってきます　竹内進(愛知県)
・赤いスモモに水アメをからめたもの。スモモをカリカリ食べ、水アメを真白になるまでねって食べた中学の頃を思い出しました
音喜多千津子(埼玉県)
ほか、長尾俊彦(香川県)、高柳閑雲(愛知県)、白戸麻奈(東京都)、楠瀬美香(高知県)

イカ焼

・いかの姿焼・焼きそば　三人の子を連れて幸せの頃でした
橋本良子(埼玉県)
ほか、竹澤茂子(大阪府)、白井昭子(埼玉県)、坪田勝秀(鹿児島県)

たこ焼き

・たこ焼　田中昶(鳥取県)
・孫を連れて行くようになると「タコ焼」を必ずねだられた
仁藤ひろじ(埼玉県)

焼ソバ

・焼きソバ　目の前で大量に作っているのは魅力的でした
倉岡依世(東京都)
ほか、苧木珣子(滋賀県)、鈴木義雄(福島県)、羽根田明(神奈川県)、杉村美保子(岩手県)、冨樫和子(山形県)、神一男(静岡県)

ラムネ

・ラムネと真桑瓜
齊藤安弘(神奈川県)
ほか、吉村充治(埼玉県)、阿部澄江(宮城県)、加用章勝(千葉県)、渡邊昭雄(東京都)

その他

・あめ細工のあめ　ハサミひとつで器用に形ができあがるのがいつもながら感心してつい買ってしまう
岩崎令子(大阪府)

・家族で食べる「お好焼」
山崎吉晴(群馬県)

・みそおでん　大場きよし(宮城県)

・カルメヤキ　北野耕兵(千葉県)

・三つ矢サイダー
阿部徳夫(宮城県)

・缶ジュース、金魚など
釣本峰雄(北海道)

・西瓜　大江秋月(兵庫県)

・限界集落の育ちで店も屋台も皆無、井戸から上げた西瓜
佐藤政實(埼玉県)

・客人の酒後ソバを取る
野村牟人(東京都)

・みたらし団子　あつあつのを待って食べる味はいくつになっても忘れられません
吉野成行(愛知県)

・あん入りどら焼き
松尾正一(岩手県)

・ニッキ水　竹村穏夫(大阪府)

・薄荷あめ　小黒深雪(新潟県)

・バナナ　重原昇(新潟県)

・缶ビールです　稲葉民雄(千葉県)

・冷しアメのビン入り・水入り風船ヨーヨー
森崎榮久(岡山県)

・ひやしアメ　日根野昭治(大阪府)

・福飴　吉澤昌美(長野県)

・ぶどう　田中迪子(東京都)

・べっこう飴とマンガ本だったように思うが、たしかでない 炭崎博(滋賀県)

・ベビーカステラ　堀木和子(大阪府)

・ポップコーン　緑川禎男(埼玉県)

・昔、自転車に水飴の壺を乗せ、割箸一本に飴をすくって犬、リス、ウサギなど作って子供に人気がありました
村上千代(大阪府)

・照国神社（六日灯）で焼とうもろこしが美味だった
濱崎祥子(鹿児島県)

・焼きどり(老人会が毎年自作で造っている)　図子利明(兵庫県)

・焼きまんじゅう・金太郎あめなど
木暮珣子(群馬県)

・子供と行った夏祭、その后孫と行った夏祭、決って「焼りんご」を買っていました　浦橋克行(兵庫県)

・竹づつ羊羹、ダンゴ(串やき)
髙須孝(愛知県)

・伏角飴(ブガキアメ)、ノミで割って小さくする
村岡盛英(群馬県)

・心太(ところてん)　長野光康(神奈川県)

・心太白玉　村上克哉(東京都)

★風物詩・おもちゃ

金魚すくい

・金魚、亀、育てて大きくなりました
関根千恵(埼玉県)

・すぐ死なせるのに眺めて楽しんだ
居原田連星(大阪府)

・持ち帰ってかなり大きくなるまで育てた記憶。旅で留守にし、帰宅後、鉢から飛びだし自殺した金魚発見。寂しかったのでしょうか。可哀想でした　松田重信(埼玉県)

・子供の時は金魚釣りいつも釣れなくてお負け。大人になったら現在は焼鳥とビールかな　星一子(神奈川県)

ほか、環順子(東京都)、髙橋邦子(高知県)、久保和友(滋賀県)、星野三興(新潟県)、佐野和彦(静岡県)、石原岳(群馬県)、岩永登茂子(大阪府)、小山恵美子(大阪府)、三ッ木宗一(東京都)、坂元正憲(東京都)、佐野澄江(山梨県)、大橋恒次(新潟県)、阿部幸子(宮城県)、北岡晃(兵庫県)、青木ケン子(埼玉県)、竹本惇子(山口県)、鈴木青古(茨城県)、山岡美智子(高知県)、上村元義(神奈川県)、小山和香(大阪府)、小野寺裕子(宮城県)、安田翔光(香川県)、山崎鶴恵(鹿児島県)、野木宗信(奈良県)、佐瀬チエ子(神奈川県)、工藤昌見(山形県)、渡辺茫子(千葉県)、安部哲(新潟県)、高杉杜詩花(北海道)、高松秋良(群馬県)、青木凉子(埼玉県)、小林七重(新潟県)、秋谷静子(茨城県)

海酸漿

・鳴らせもしないのに、夏が来るたびに買ってもらっていた。小さな竹籠に入っていて、子供ごころに夏の情緒を感じていました。ピンクや黄に染められた海酸漿が巻貝の卵嚢で作ったものと知ったのは縁日で見かけなくなった、ずっとあとのことでした
稲垣恵子(埼玉県)

・友達同士ならして遊びました
鈴木みえ(長野県)

・海ほうづきが忘れられません。あれは、何だったのでしょうか。口に入れて「ギュギュ」と音を出すだけのもの　奥那於子(大阪府)

ほか、福原喜恵子(群馬県)、中田文子(大阪府)、守田貴久(東京都)

水ヨーヨー

・水の入った風船にゴムがついていて、とてもきれいなものでした
村木友光(埼玉県)

・ゴムが丁度よく伸びボンボンと手で打つ感触が楽しくて…
鈴木章(新潟県)

ほか、新井麻里(埼玉県)、藤井碩子(山口県)、山本直子(大阪府)、髙崎登喜子(東京都)、中山日出子(大阪府)、大阿久雅子(東京都)、前川和市(兵庫県)、佐藤信(神奈川県)、松尾康代(東京都)、栗原黎(群馬県)、岩村昇(神奈川県)、針生清(千葉県)、井田由利子(宮城県)、森川千英子(千葉県)、中野豊彦(東京都)

A QUESTIONNAIRE

団扇

・駅前でもらう天神祭のうちわ
木下精（大阪府）
ほか、早矢仕邦夫（愛知県）、鈴木与平（宮城県）、安木沢修風（新潟県）、石山幸枝（新潟県）

お面

・当時、流行のお面を買ってもらっていました。なつかしいです
鈴木蝶次（宮城県）

・時代、時代のもの
田島星景子（宮城県）

・ひょっとこ面
原田麦吹（埼玉県）

花火

・線香花火
山﨑ゆき（東京都）
ほか、松嶋光秋（東京都）、浅野信廣（宮城県）、五十嵐勝敏（新潟県）、須澤重雄（長野県）

風鈴

・毎年色々な風鈴を買って集めています。風鈴の合唱です
諸橋文男（新潟県）
ほか、濵田イサオ（福岡県）、清まさじ（静岡県）、池本勇（大阪府）、北村純一（神奈川県）

手ぬぐい

・染抜き手拭と扇子
土谷敏雄（秋田県）

・祭り手拭を買う。金魚すくい。鯉一匹食用
宇田川正雄（埼玉県）

その他

・指輪みたいなもの
湯浅夏以（神奈川県）

・金魚玉
萬濃その子（神奈川県）

・昔ふうせんの中に入っていたクジかなあ！あとはアイスキャンディ…
堀井酔人（茨城県）

・蛍
増本和子（大阪府）

・雑誌の付録…最近は見かけませんね
岡本恵（茨城県）

・ほおずき、千代紙、かるめ焼き
岡村君枝（茨城県）

・メダカ
篠原三郎（静岡県）

★その他

・子供の頃は、農家のせいか、貧しかったのでしょうね…。おこづかいさえなかったです。でも「日光写真」がほんとに欲しかった!!
鈴木岑夫（千葉県）

・子供の頃近所の神社の勇壮な興は記憶にあるが、その時の夜店は朝なタなに見物するだけで何も買わなかった
忍正志（兵庫県）

・お小遣いは10円。汗ばむ程握りしめて、何を買うか最後まで迷っていました
橋本世紀男（東京都）

・私の郷里のまつりは素朴なもので出店などはありません。青年達が輪になって踊っていました。したがって買った物はありません
藤沢健二（千葉県）

・娘の頃ゆかたを着て走ったら風をうけて色のついた綿あめがが飛び散り、洗っても取れない失敗を。ハッハハー
佐伯セツ子（香川県）

新潟ぶらり

★青山海岸（新潟市西区）

かつては砂丘が広がり、その先に海が広がっていた。海水浴に行くには、いくつもの砂山を越えなければならなかった。母から聞いた話である。「とにかく遠くてねえ」と、懐かしそうだった。夏の海ときいて想起することが、それぞれにあるだろう。夏の思い出、海の思い出。

青山海岸は別の名を小針浜（こばりはま）という。うつくしいと名のある村上の笹川流れも好きだが、私にとって砂浜の景色のほうが身近である。この海岸は夕日がきれいなことでも知られており、昨夏、県外に出ている弟が帰省したときも見に行った。八月の日没時間は十八時半前後。日の入りから少し経っていたが、日の落ちた海の色を楽しもうとする人が多くいたのを覚えている。

今年は昼間にカメラを持って出かけた。防砂の松林を横目にみながら坂を上っていくと、道の先はあかるく、ぱあっと開けている。新潟は海に面しているので珍しい存在というわけではないものの、海が見えると、「海だー」と言うことをやめられない。

海辺のレストラン「ポセイドン」でお昼を食べながら、海をゆっくり眺めることにした。海水浴客は多すぎず少なすぎずといった具合。ギターを背負って、砂浜をのんびり歩いて行く人がいる。少し強めに風が吹いており、紙ナプキンが飛ばされそうになる。窓枠より遠くから、スイカ柄のビーチボールが海と並行に砂浜を転がって行った。きっと向こうで遊んでいる子どもたちがいるのだろう。楽しい声が聞こえてくる。

昼食を終え、せっかくだからと波打ち際まで行ってみることにした。靴を脱いで、砂浜に足をつくと、ほどよく暖かかった。身体によさそうだが日差しは強い。ゆっくり歩いていく。水着の何人かが私を追い越し、海に飛び込んでいった。「冷てえ！」夏でも、ここの海は冷たい。でも海の色も空の色もあかるい、というより眩しい。デジタルカメラの画面が確認できないほどだ。こんなにきらきらしたこの景色をまた、思い出すときがきっとあるのだろうな、と思いながら足の砂をはらった。（菅真理子）

●お客様の『リレーエッセイ』

革のバッグ

石川明世
（岩手県・花巻市）

今年一月、父が75歳で召天した。昨秋脱水症で入院して、寝たきりになった父の退院以来、訪問看護師の助けを受けて介護してきた。

「病院と家とどっちがいいの。」ときくと、「病気になったら病院がいいね。」としみじみと答えた。「でも今は家がいいでしょ。」という問いかけには、「お前がいなければな。」と憎まれ口をたたいた。便秘や慢性気管支炎等の不調を気丈に耐えてきたが、その時が近づいていた。「血のつながらない私を育ててくれて有難う。」と泣いてとりすがる私に、「立派になれ。」と言い残していった。

がらんとした家にひとりとり残されてしばらくは、挨拶をする相手のいない生活に戸惑った。父の愛用していた物を片付けながら、愛きょうのあるひとみを細めた父の写真を見ると、共に過ごした日々が記憶によみがえってくる。

父は、二才の私を連れた母と結婚した。背が高く、すらりと手足の長い、石原裕次郎のようなこの男に母はひかれたらしい。自分には子供ができないかもしれない、と父は、無邪気にまとわりつく、物心つかない私を育てようと決意したという。両親が結婚した翌年生まれた妹と分け隔てしないで育ててくれた。

父は農林水産省に勤めていた。国の調査船に乗って、長いときは数ヵ月、国内外のあらゆる地域に出かけていた。出航前、母や妹も私も、父に土産品をリクエストした。航海中、父と文通したが、手紙には誤字脱字が多かった。アメリカに寄港したときの便りには、「ジーキを買ったからな。」としたためられていた。「ジーキって何だろう。」と頭をひねった。家族への土産が列挙されているから、愛犬のためのジャーキーではないかとひらめいた。長い航海を終えて帰宅した父を、「ジーキのおじさんが帰って来た。」とからかうと、「意味が分かればいいんだよ。」と照れ笑いをしていた。

家にいると、船のコックに教わった方法で、餃子を作って食べさせてくれた。にらやひき肉のたっぷり入った具を包むのは手伝ったが、レシピを聞いておかなかったのが悔まれる。「お父さんのぎょうざ、おいしいよ。」とほめると、「また作ってやるからな。」と得意になった。料理が好きで、コック志望だったが、片付けを嫌がったので、母は、「好きなことしかしないんだから。作るんだったら片付けもするべきよ。」と愚痴をこぼした。

家族で食卓を囲んでいる時。父は、「ひじをつくんじゃない。」「ふきんで口をふくんじゃない。」と顔をしかめて、妹や私を注意したが、自分は、テーブルに覆いかぶさり、ひじをついてご飯をかきこみ、ふきんで口をぬぐっていた。レストランで見かける、よそのお父さんは、子どもが少々行儀が悪くても意に介さないのに、何故、この父親はこんなに口煩いのだろうと思った。しかも、箸に野菜を沢山はさんで、私の口の前で待っていることがあった。私が口の中のものを飲み込み終わるのを見はからって、「肉ばかり食べていると身体に良くない。」と箸につかんだものを押し込もうとした。はたで見ていた母は、「まったく強引なのだから。」とあきれていた。私はあらがいようもなく、しぶしぶ押しつけられたものを食べた。この有難迷惑と思われる方法のおかげで、野菜嫌いにはならなかった。

ある日、母と二人でお茶を飲んでいた際、「お父さんを『分解屋さん』と言う人がいるよ。」と聞かされた。動かなくなった時計を、「俺なら直せる。」と自信満々にとり組んだが、結局いじくり壊してしまったという。「お父さんは、家族とケンカして、玄関のドアをこわれるかと思う位、乱暴に閉めたこともあるし、やっぱり、こわし屋さんかなあ。」とつい言ってしまった。母は「お父さんに言うな。怒るから。」とにやにやしていた。

数年後、パンパンに物をつめたせいか、革のバッグの持ち手が外れ、修理に出そうかと迷った。裁縫用の針と糸とで縫いつけようとしたが、固くて針がささらない。さんざん持て余した挙句、居間のテーブルの上にほったらかして、他のバッグを使うことにした。

その数日後、二階の父の部屋を通過しようとしたら、大きく開いた扉の向こうに、例のバッグと格闘している男の姿があった。太い針と糸を手にして、縫いにくそうだった。私には気付かないようだ。固唾を呑んで見守った。私の方こそ「こわし屋さん」かもしれない。声をかけようかと思ったが、ばつが悪いので、足音を忍ばせて、階下に降りた。

翌日、「大事にするんだぞ。」ぶすっとして、父は修理したバッグを手渡した。ミシン目のようにそろった縫い目を見つめたまま、「有難う。悪いね。」とぽつりと言って、自室にひき上げた。こわし屋でなく修理屋かな。

あの革のバッグはもうないが、持ち手の縫い目は今だに心に刻まれている。

滋味しみじみ◎◎◎

母の味

佐藤茂三郎様（千葉県・柏市）

明治・大正・昭和・平成と激動と波乱に富んだ4つの時代を生きた母は、一昨年104歳で永眠した。「ありがとう…」慈母の様な笑みのひと言、今も耳朶に新しい。

小作の父に嫁し、8人の私達を育ててくれた母の労苦、感動を越える。

●五木めし

桜散る東北の分教場を競い会う子供達への応援、母親の姿がいたましい程であった。

花筵に敷いた莫蓙、いっ時でも家族の団欒、母の作った五木めし、身近に在る具材に丹精込めた母の味、絶品だと思い忘れられない。

五木めしは素朴である。待遠しかった休憩時間、広げた重箱に詰められた五木めし、散る花のコントラスト絶妙である。ごぼう、人参の土の香の滲む煮染め、取り立ての自然の新香、飾りない昼食の場、遂きない私達との会話、楽しい想い出である。

今も事ある毎に五木めしを味わい母を偲んでいる。母の永遠の味、五木めし忘れまい。

花びらに一家団欒五木めし　　茂三郎

ポストカード好評発売中！

毎回ご好評いただいたいる当社のオリジナルポストカード（1組8枚入り500円×各季節）。今回は秋バージョンより「野ぶどう」を同封いたしました。お気に召されましたら、同封のアンケート用紙にご希望の季節、セット数を明記のうえ、**必要金額分の切手を同封のうえ封書にてお申し込みください。**

第3回 良寛・国上寺全国俳句大会

新潟県燕市にある国上寺は、良寛が47歳から約13年間の最盛期を過ごした草庵「五合庵」のあるお寺です。この国上寺にて第3回良寛・国上寺全国俳句大会が開催されます。大会投句は嘱目2句（選者 中原道夫）。秋の実りを迎えるこの時期、良寛のこころに触れに越後平野まで足をのばしませんか。

■日時／平成24年9月22日（土） 午前10時受付

〔お問い合わせ〕 国上寺・五合庵

〒959-0136 新潟県燕市国上1407 ☎0256-97-3758

「鎌倉方大忌」のご案内

望郷の歌人・山崎方代が亡くなって、今年で27年目を迎えます。生前、方代さんがよく通っていた鎌倉の名刹「瑞泉寺」では、毎年9月の第1土曜日、多くの愛好者が集い法要の後、基調講演や親交のあった方々が思い出を語りあいます。数奇の運命をたどり、没後も「ほうだいさん」として慕われているその人間性を存分に感じられる集いです。

■日時／平成24年9月1日（土） 午後2時より

〔お問い合わせ〕 鎌倉・瑞泉寺 〒248-0002 鎌倉市二階堂710

9人目のメンバー！

「喜怒哀楽4月号」の「9人目のメンバーになりませんか？」の呼びかけに、早速に「校正できるよ！」「郵送費だけでもとって」「イラスト・カット描きで協力できます」など、快く手を挙げてくださり誠にありがとうございます。今後「喜怒哀楽」が回を重ねていくなかで、ご依頼することがあるかもしれません。その節は、何卒よろしくお願いいたします。

「ご縁ブック2012」「2013年手帖」

7月31日（火）締切の「ご縁ブック2012」「2013年手帖」に、今年も多くのご投稿をいただきありがとうございました。ご縁ブックは12月上旬、手帖は11月中旬を目処にお送りする予定です。楽しみにお待ちください。

スタッフの一言

Q. 夏祭りで必ず買っていたものは何ですか？

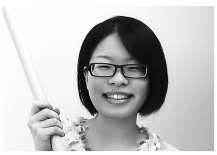
木戸 敦子

綿あめはキャラクターの柄で選ぶ年齢を卒業後、味を追究。作り置きでぶら下がっているものではなく、袋に入れてつり下げる瞬間を狙って「おじさん1つください」。出来立てのあのおいしさといったら！

古川久美子

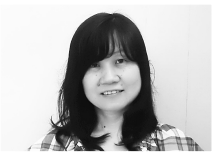
りんご飴とチョコバナナ!! 新潟名物ぽっぽやきは、誰かが買うので自分では買わない（笑）。変な味のかき氷とかもついつい買ってしまう……。最近祭にいってないなぁ……。

菅 真理子



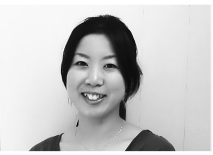
小さいときは父に綿あめと水ヨーヨーを買ってもらい、就学してからは冷やしパインを買うことが多かったような…夜店をみるだけで満足してしまって、あまり買いものをした記憶がないですねえ。

山田 千秋



何といってもりんご飴、あのかりかり飴と甘酸っぱいりんごが同時にお口の中に入った時のコラボが何ともいえません。最後のほうは、りんごだけになるのですが、種ギリギリのところまで食いつくので割り箸が折れることもあったなぁ…。

木伏芙美恵



新潟名物ぽっぽやきです。「行列が出来てるところは美味しいのよ」という母の教えを今でも守ってしまいます。おもちゃ（お人形のお洋服）も必ずおねだりしていました。最近はかわった食べものも沢山あって迷います。

上村真智子

子供の頃、お祭りの屋台のおもちゃ屋さんでキリストの像が付いている安っぽい銀色の十字架のネックレスを父にねだると、「キリスト教じゃないのに…」とブツブツ言いながらシブシブ買ってくれた。

金子ゆり子

遠い昔のことであまりおぼえていませんが、秋祭り（確か10月17日だったと思います）になると、親戚が多く来て、囲炉裏に串刺しの鮭が何本も立ってました。それがご馳走でした。それに親戚の持ってきてくれたお土産が楽しみでした。

石山由希子

新潟名物ぽっぽやき！は黒糖が芳しく…今でも定番です。たこ焼き、オムそば、フランクフルト…。最近は変わった露店も増え、スパボー（スパゲティの乾麺を揚げたもの塩味）、シシカバブ（トルコ料理風・焙った肉です）など楽しいかぎりです。

吉田 瞳

新潟県下越地方ですから‥ぽっぽ焼きです！子供の頃は祭りでしか買って食べられなかったから絶対買って食べてました！（写真右）結月の成長を楽しみにして下さってとても嬉しいです！ありがとうございます。

11ヶ月になりまちた。お兄ちゃんもよろちく!!

桜丘高校の小さな黒板

千葉　聡

●プロフィール
1968年横浜市生まれ。歌人集団「かばんの会」同人。1998年短歌研究新人賞を受賞。歌集『微熱体』（2000）、『そこにある光と傷と忘れもの』（2003）のほか、本職である高校教師としてのエピソードが満載の短歌エッセイ『飛び跳ねる教室』がNHKや朝日新聞で取材を受けるなど評判に。本年より角川「短歌」、「小説すばる」にて連載開始。

新しい12人目の著者は歌人の千葉聡様。現役の高校の先生で第3歌集『飛び跳ねる教室』は、前回までご執筆いただいた佐藤弓生様いわく「映画化したらおもしろそうです。なにより文章のはこびのうまい方です」とのこと。第1回目から胸にズドンときました。

この四月から横浜市立桜丘高校に勤務している。国語科準備室の前に小さな黒板が置いてあった。レストランの「今日のおすすめメニュー」が似合いそうだ。着任早々、俺は「今日のおすすめ短歌」を書いた。

銀色のペンキは銀の色でなくペンキの色としての銀色　　枡野　浩一

「これ、呪文か何かですか？」

書類を抱えた若い同僚が声をかけてくれた。

「短歌ですよ。ちょっと面白いでしょ？」

同僚は「そうですかぁ」と通り過ぎた。

その次の日は、桜の季節にふさわしい一首。

桜ばないのち一ぱいに咲くからに生命（いのち）をかけてわが眺めたり　　岡本かの子

「あ、この歌、昔、教科書に載っていましたっけ」

国語科の大先輩が嬉しそうに話しかけてくれた。よし、次はもっと喜んでもらうぞ。

誤植あり。中野駅徒歩十二年。それでいいかもしれないけれど　　大松　達知

「千葉さん、今日の歌、面白かった」

向かいの席のお姉さん先生が褒めてくれた。やった！

はい、あたし生まれ変わったら君になりたいくらいに君が好きです　　岡崎裕美子

授業を終えて廊下を歩いていたとき、一年生の女子が声をかけてくれた。

「黒板に短歌を書いているのって、千葉先生ですか？」

「そうだよ」

「今日の歌、とっても深いと思いました」

国語科に戻ると、黒板は女子たちに囲まれていた。いよいよ高校野球開幕。俺はこの一首を書いた。

久方のアメリカ人のはじめにしベースボールは見れど飽かぬかも　　正岡　子規

与謝野寛から松田わこまで、その日その日を彩るにふさわしい短歌を書き続けた。雨が降れば雨の歌を。風が吹けば心ざわめく歌を。黒板の写メをツイッターに投稿すると、多くの生徒から「先生、見たよ」と言われた。

栗木京子の恋の歌を書くと「もっとこういう歌を読みたいです」と言われ、穂村弘を紹介すると「この気持ち、よくわかる」としみじみ語られた。

もうすぐ一学期も終わる。よく声をかけてくれる女子が言った。

「先生、夏休み中、小さな黒板はどうしますか？」

「もちろん毎日書くよ。でもバスケ部の合宿中は更新できないけど」

「じゃ、そういうときには私が書いてもいいですか？」

「うん。よろしく」

その次の日、チョークの粉はきれいに拭き取られ、小さな黒板はきれいに磨かれていた。その真ん中に「千葉先生、今日も一首、お願いします」と書いてあった。

2012. 8. vol.63　（2012年8月10日発行／隔月発行）
●発行・印刷／株式会社ミューズ・コーポレーション
喜怒哀楽書房　株式会社ミューズ・コーポレーション
〒950-0801　新潟市東区津島屋7-17
TEL 025-250-9555 FAX 025-250-9550
0120-819-395
e-mail odp@eseihon.com ／ HP http://www.eseihon.com
郵便局口座番号 00530-4-81370　口座名 株式会社 ミューズ・コーポレーション

編集後記

暑い夏がやってきた。娘からはやれこの祭りに行った！花火に行った‼などとイベント満載のメールがくる。かつては私も「!」「!!」的な夏をおくっていた。でも朝、百日紅を見て思い出すのは義母の「やらてー、あの百日紅。掃いても掃いても落ちてくる」義父「だったらみんな切ってしまえばいーろー」といった会話や、お昼だけでもつけようと、クーラーのきいた台所で「のど自慢」を見ながらそうめんをすすっていた夏の一コマ。夏は、隣家のおじさんのいびきも聞こえてくる。誰かと過ごした夏、平穏な日常。淡々とした日々の有難さを感じつつ、今年も百日紅と格闘する。ご自愛ください。（木戸敦子）